

大事なのはこの場所と、祖母がいつも指をさしたのは足でした。この

像のメッセージはどんな時も挫けず諦めず一歩でいいから足を前に出す、行動をすることを常に大事にしないといけないことなんです。丹精を込めて耕した田畑が大洪水であつという間に台無しになる、もう絶望的な気分です。それでも一歩から始めよう、瓦礫を拾うこと、一鍬を入れること、そんなふうになんか積み重ねをしながら復活へと向かおうと、そう励まし続けた、つまりどんなにひどい時でもとかく小さな行動を重ねようという呼びかけでもあるわけです。そして、ようやく田畑が復活してくると多くの人は思いますが、「やれやれようやく復活した」と。でもその時も歩みを止めてはいけないと金次郎は言うんです。もう少しこの田んぼをよくできないか、もう少し収穫量を増やせないか、もう少しおいしい作物にできないか。このもう少しという気持ちに貪欲に持ち続けようじゃないかと、いい時も悪い時もこの小さな一歩が鍵になる、そんなふうには言うんです。金次郎はこの「もう少し」に生涯貪欲でした。土木技術の改良、あるいは堰の技術、測量の技術、様々なものを磨きに磨いたそんな人生でもあったのです。まさにこの小さな一歩、そ

れを実践したのが金次郎でもあったわけです。

この姿で町を歩いてきた金次郎は村人たちに奇妙な奴、変人、気持ち悪い奴と言われていました。それは皆がやる気をなくし、絶望し、悲しみに打ちひしがれているのに、黙々と懸命に子どもながらにやっていることが薄気味悪いということもありました。もう一つ、読んでいた本は武士が読む本だったので。自分をわきまえない奴だと思われてもいたんです。でもこの姿を貫きました。ばあちゃんと言いました。「これは優等生になりなさいという像じゃないのよ、人から何と言われようとう思われようと自分にとつて大切なことを貫くということを伝えようとしていく姿なんだ」と。「自分にとつて大切なことは何かを考え、それを貫く、それがこの姿に凝縮されているんだ」と言うんです。そして、ばあちゃんは続けました。「だけど困ったことに自分には二人の自分がいる。一人目は自分の都合を考えたくなる、悪いことをしたくなる、いわゆる悪心といわれる自分、雑草が生えてくるように心の中に生えがちなのだ。そういう悪心は私たちには絶対あるんだ」と。「でももう一つの心も必ず自分の中にある。どんな土地にも花が咲くのと一緒で、自分

の中には良心という良い心もあるんだ。本当の答えは、先生が、社会が、親が知っているわけじゃなくて自分の良心が知っているんだ。だからどんな時でも自分の良心との対話をしっかりとしなさい。金次郎のこの姿はどんな時でも良心を裏切らずに良心を大切に、しっかりと自分を守って行けという姿なんだ」と言われたんです。藤樹先生も致良知の良知という形でおっしゃいますが、この良知とか良心とかいう自分の中に根差しているそれらを信じていくこと、あるいはそれらと対話し、裏切らないこと、心というものを大切にすること、この国の民族らしい考え方もかもしれない。

金次郎は六百の町々を復活しましたが、事情も様々でその計画はオーダーメイドでした。しかし、始まりは必ず同じ方法でした。金次郎らしいやり方だと言えるかもしれない。それはリーダーたちに「あなたは今なにを望んでいるのですか」と問いかけることでした。リーダーたちは、田畑を立て直し、年貢として納められるようになることだと答えます。金次郎は言います。「その考え方では復興は絶対うまくいかない。武士は何をすべきかを考えてほしい」と。そもそも武士とは村人が生活できるように命をかけて戦って



きた者です。「もう一度自分に立ち返って自分の良心と対話をしてほしい」と。金次郎はそのことを『道に戻る』こととしました。本当に大事なものは「一人ひとりの心に火を付けること、仲間と共にやっていくこととすること、相手を勇気づけることではないか」と呼びかけました。話を聞いて武士の心も高まり、自分たちができることはまだあるのではないかと考えるようになります。「一見大変なピンチ。しかし武士と村人が繋がる大事なチャンスではないか」と。「しっかりと困っていることに向き合うことができたとき、そこには深い根っこが生まれるのではないか」と言うんです。金次郎自身は相手を支えること、弱みに向き合っていくことが大事にしました。が、重要なのは救済をすることではない、勸業をすることだと強く言うていました。

本年三月二十一日に開催しました「中江藤樹心のセミナー」で、中桐万里子先生にご講演いただきました。その講演内容を淵田豊朗副会長によって文章化され、今号と次号に分けて掲載いたします。